

## 資料② 障子と畳

さて、食事における軽さの象徴が著なら、住居におけるそれは、さしずめ障子である。杉の棧に、美濃紙をはった障子が、よく手入れのゆきとどいた敷居の、ふかき2、3ミリぐらいの溝の上を、指一本でスーッとあく、などという光景は、これまた外人の目をみはるところである。（中略）

日本の和風住宅の室内は、たいていこの障子や襖でしきられていて、それらを全部とっばらうと、家じゅうが「ひとへや」のごとき状態になる、というのが、ひとつの大きな特色である。むかし、ところによってはいまでも、田の字型をした農家では、冠婚葬祭のときに、障子や襖をみなとりさって、招宴の場としていた。そういうことをかんがえあわせると、日本の住宅は、基本的には「一室住居」だということが理解される。一室住居の室内を、障子や襖という一種の「目かくし」により、いくつかのコーナーにしきって、家族が生活しているのだ。それは日本のすまいの空間分割の大きな特徴である。（中略）

障子そのものは、奈良時代にはなく、平安時代の寝殿づくりになってはじめて登場する。さいしょは舞良戸といわれる板をはった障子、ついで唐紙障子、つまり襖である。これに和紙をはったあかり障子——今日いう障子が発明されるにおよんで、日本の室内空間が、かぎりなく膨張する物質的基礎があたえられた。すなわち襖や障子は、その軽さによって室内の空気をみだすことなく、スムーズにあげしめすることができると同時に、いちおうの室内のしきりともなり、さらに襖の上にとりつけられた欄間や障子の和紙は、室内の奥ふかくまで、戸外光線、すなわちあかりをおくりとどけることができるのだ。

西洋人は、日本の家が木と紙でできている、ときくと、どんなにチャチなものかと想像するが、しかしその紙によって、何十畳敷、何百畳敷という大広間を、つぎつぎつないでゆく書院建築のような巨大な「一室空間」に接すると、おどろきの声をあげるだろう。桂離宮などは、その日本の「一室空間」文化の最高傑作のひとつである。モンスーン地帯にぞくする雨の国でありながら、紙一枚をもって「壁」にかえる、という曲芸的な発想を生みだしたところに、日本建築のおもしろさがある、といってよい。

畳という床材料は、世界の住文化のなかでも、非常にめずらしいもので、日本に独得に発達したものと見える。フランスの知日家のあいだでは、日本人なみに会話が熟達することを、タタミゼ *tatamiser* といっているそうだが、そういう「動詞」が生れるくらい、畳は日本とその文化を象徴するものになっている。

さて、その畳の特色は、一口にいって、座具にも寝具にも使える敷物を、ユニット化して、へやの中にしきつめたもの、ということができる。ではこのように、ユニット化された敷物というのは、どうしてつくられてきたものだろうか。それは、じつは、私たちの室内生活のもうひとつの大きな特色である、椅子とベッドをほとんど発達させてこなかった、という日本の住空間の歴史と関係がある。

原始住居が土間生活であった、ということは、樹上住居などのごく一部の例外を除いて、世界的に共通したことがらであった。日本もその例外ではないが、ただその原始住居である竪穴住居などの土間には、早くから藁や糞をしき、その上に座ったり、寝たりする生活がおこなわれていた。言いかえると、日本人は藁や糞を土間のうえに敷きつめて暮してきたのである。つい最近まで、日本のいなかの農家では、まだこういった生活がつづいていた。

（上田 篤著『日本人とすまい』岩波新書 P49～54, P67～68）